4/3 ヨハネの福音書 13 章 1-20 節「主があなたの足を洗ったので」

小池 宏明 牧師

今日は、十字架の前の夜「過越の食事」における「洗足」と言われる箇所である。食事の間に、イエス様が弟子たちの足を洗われた。

＊愛し尽す生き方

1 節「**さて、過越の祭りの前のこと、イエスは、この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時が来たことを知っておられた。そして、世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。**」

主イエス様は、確かに父なる神様のご計画のとおりに、この世を去って行かれる。しかし、その前に、イエス様は、全身全霊を尽くして、ご自身の愛を示された。「最後まで愛された」の「最後まで」は「極みまで」と訳しても良い言葉である。本来、客人の足を洗うのは奴隷の仕事だから、主イエス様は弟子たちの奴隷のように、仕えるしもべの姿を示されたと理解してよいが、ここでの強調点は、イエス様が「極限まで愛された」ことの証しとして足を洗う行為になった、ということだ。いやいやさせられる奴隷の仕事ではなくて、愛の行為としての「洗足」なのだ。私たちの日常生活は多忙だ。仕事に、家事に、勉学に、やるべきことが山ほどある。時には奴隷のように働いていることがあるだろう。しかし、心まで奴隷になってはならない。私たちは人生が終わるまで、愛に生きるのだ。極みまで、愛し尽す生き方が私たちの人生なのだ。主イエス様がそうされたのだから、主の弟子として、主なる神様に仕えて、隣り人に仕えて生きたい。仕えることこそ、最高の愛情表現なのだ。

＊愛することは赦すこと

イエス様は弟子たちの足を洗い終えられると、「主であるわたしを見習うよう」に勧めています。この事は、単に、肉体の足を洗うこと以上に罪の心が聖められることを意味している。主のご愛によって、霊的な聖めを受けてこそ、互いに赦し合うことができる。愛の実践とは、赦すことに繋がっている。私たちは、自分の力で他人を赦すことはできない。他人を赦そうとするとき、あなたを愛して赦して下さった主イエス様が御霊と共に働いて、あなたと重なるようにして、一緒にその人を赦しておられるのだ。

願わくは、私をまことに愛あるキリストの弟子とさせてくださるように。敵をも愛して赦すことができるキリストの弟子になれるように。

うか？祈り求めよう。